

Fate/Wars 泡沫のパラダイムシフト

氏家 慷

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔術師として、優れている事を証明するため

アルバート・シヨーペンハウアーは、新たな聖杯戦争を企画し実行する。

これは、全く新しい聖杯戦争。
新時代の幕開けである。

目次

F a t e / W a r s	泡沫のパラダイムシフト	8	46
F a t e / W a r s	泡沫のパラダイムシフト	7	40
F a t e / W a r s	泡沫のパラダイムシフト	6	37
F a t e / W a r s	泡沫のパラダイムシフト	5	28
F a t e / W a r s	泡沫のパラダイムシフト	4	26
F a t e / w a r s	泡沫のパラダイムシフト	3	21
F a t e / W a r s	泡沫のパラダイムシフト	2	13
F a t e / W a r s	泡沫のパラダイムシフト	1	1

ある日の昼下がりに時計塔の廊下を一人歩きながら、アルバート・シヨーペンハウアーは苦悩していた。

今日の講義でも、教授に馬鹿にされたからだ。

『シヨーペンハウアー君、いつになったら君はまともな論文を発表を提出するんだね。君は魔術師の由緒正しい血統の溝を電気なんかで埋められると主張するが、そんなはずは無いだろう?』

『いいえ、教授それはあなたの考えが甘いのです。私の、論文にもある通り、魔術師の血統の溝は、魔力量のみと私は、考えます。何故ならば、培った知識は発表された論文や魔術書で埋められる為です。そして、私は、その唯一の溝の魔力は電力を魔力に変換する事を実現すれば、無くなると言っているだけです。シンプルで分かりやすく書いたはずですが、何がわからないのですか?』

『だから、その、電力を魔力に変換する事だよ!』

いいか、そんなこと出来るはずないだろ。魔力とは、我々、魔術師が先天的に授かるものであり、電力とは、ちんけな灯りを灯すために作り出された物だ。なんで、そんなことが出来る? 石から金を作る方がまだ簡単に思えるよ』

ははははつと私以外の生徒一同大爆笑

だが、私はそんな程度では屈さない

『そんな事はありません、アインシュタインの理論で考えれば全ての物質はエネルギーです。魔術で作りに出した物だってエネルギーなんです。全ての鍵はエネルギーですよ! 魔術で作ったゴーレムだって魔力が切れれば、ただの瓦礫になるでしょう。電気で動く機械も同じです。なぜわからないんですか? 二つは根本的には、同じものなんですよ。』

『馬鹿馬鹿しい、君にはいくら言ってもわからないようだから、まともな論文を提出するまで何度でも再提出させる。』

辺りの生徒から、私を嘲笑する声が聞こえる。

『もう、いいですあなたの元ではもう、学べない。そのソロモン神殿が

建っていた頃から1ミリも進んでいない古くさい知識で、永久にこの教授で満足してろ!』

『なんだと、いいか貴様は、頭が冷えるまで講義には、出席するな!いいいな!』

『言われなくても、こんなところで暇を潰す時間はない。』

私は、その場から立ち去り頭を、掻き毟りながら暫く歩いて今に、至る。

『なんなんだ、あのアホは魔術は全ての理論を超越すると思つてやがる。物理法則を全く考慮せずに考えていても永久に根源には至れないぞ。』

前方から、教授二人が話ながら歩いてくる。

『おい、聞いたか? 亜種聖杯戦争の事。』

『聞いたよ、俺も参加したかったなー』

『でも、この前のは聖杯が爆発したそうだけ。』

『本当か? やつぱり出たく無くなったな。爆発は怖い』

『ははっ、そりやそうだ』

二人の教授は笑いながら、歩きさつた。

『今の話が本当ならば、その跡地に行けば、聖杯の残骸か何かが見つかるかもしれない。ふふっどうだ馬鹿な教授ども物理的に考えないからこういう事を誰も思い付かないんだ。さっそく調べて行つてみよう。』

聞き込みをして聖杯跡地に、到着。

『ここか、酷いな。凄いエネルギーだ。これなら、何かあるはずだ。』

瓦礫を適当にひっくり返し、光るものを発見。

『・・・本当にあった! 聖杯の欠片だ。』

何かあれば、良いと思つていたがまさか本当に見つかるとは、ここは、暫く誰も近づかないだろうし、仮の工房に使おう。さっそく以前から試したかった事を実践しよう!』

大はしやぎで一度家に帰り必要な物を揃えて戻る。

『よし、準備は整った。さあ、始めよう全く新しい聖杯戦争を。』

まずは、召喚陣を書く。そして、触媒をその上に置いた。用意した、

触媒は、ガリア戦記、我が闘争、相対性理論について書かれた本、それに、ニコラ・テスラの自伝だ。

『触媒とは、要はこの世界と座を繋ぐ為に残された錨だ。その人物に
関係のある情報が詰まっていれば良いはずだから本でもなんら問題
は無いはずだ。』

なぜ皆、わざわざ骨董品を用意するんだ？』

そして、最後に本の近くに聖杯の欠片を置いて、

詠唱を始める。

『素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。』

降り立つ風には壁を。

そうだ、私の野望はここから始まる。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

私は、全てを知る者。

閉じよ。閉じよ。

そう、私は全てを知るべき者。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

—— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理ことわりに従うならば応えよ。

私と、同じく野望を抱いた者達よ。

私に共感する者達よ。

誓いを此処ここに。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷しく者。

そして、常世総てを掴むもの。

汝、三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よっ！』

召喚陣の上に4人が現れる。

現れた者は、言わずもがな。

「new page」

『成功だ！やはり、私は正しかった。』

チョビヒゲの男の後ろに3人並んだ英雄達は、私にかしづき、チョビヒゲの男が私に、語りかける。

『我ら、召喚に応じ参上した。』

見れば此度の聖杯戦争は普段の物とは、少し異なるようだ。マスターまずは、あなたの思惑を我らに聞かせて貰いたい。』

『流石、歴史に名高い賢者達。』

話が、早くて助かる。私が、君たちを呼んだのは、聖杯戦争を始める為だ。』

『それは、わかっているが？』

『ふふっ』

いや、言い方が悪かった。君たちには、新しい聖杯戦争をするための、手伝いを、して貰いたい。』

『ほう、それは、興味深い。』

それで、何を、すればいい？』

チョビヒゲの男は不敵な笑みを浮かべ、楽しそうに聞いた。

『その前に、後ろの方々、どうぞ楽に聞いてください。』

一同、適当に腰かける。

『それを、言われるのを、待っていた。私は、こういう軍隊じみた事は嫌いでね。』

ボサボサの髪の毛の男は不機嫌そうにいった。

『わかっています。すみませんアインシュタイン。』

では、本題に入ります。私は、電力を魔力に変換して無尽蔵の魔力を手に入れた。テスラ、アインシュタインそれは、可能ですか？』

二人は少し話し合い当然の様に。

『可能だ。』と言った。

私は、ほくそ笑みながら言った。

『よし、見たか教授！』

あなたに否定されて2時間で私が、正しい事が、証明されたぞ。ざ

まあ見ろ。』

『それでは、さっそく取りかかろう。』

まずは、発電装置と超高性能のコンピュータ、そして、それを操作する端末とモニターを用意してくれ。』

『了解した。』

ものの数分で、完成して、驚愕した私を、置いてテスラを始めとする4人は次の指示を待った。

『で、次はどうするんだ?』

『では、そのコンピュータ内に私が考えた術式で、電腦空間を形成する。そこで魔力を操作できる様にしてくれ。』

『心得た。』

またしても、ものの数分で完成。

待ちくたびれた。チヨビヒゲの男と月桂冠の青年は、チェスを楽しんでいる。

この二人のチェスか、凄く見たいが、先に進もう。

『では、これからが、本番だ。』

これから、あなたたちには、私が組み上げた電腦空間で、聖杯戦争を、してもらおう。』

『やつと、始まるのか決着はつかなかったな。』

『お前が、チヨビヒゲを擦りなが長考しなければ終わっていたがな。』

『何を言う、後数手で私の勝ちだったよ。』

『本題に入って良いかな?』

『『かまわない』』

『よし、では、ルール説明だ。』

これからあなた達には、電腦空間で聖杯戦争をして貰う。ルールは、当然相手を皆殺しにした方の勝ちだ。舞台設定は、この世の中で最も信仰に疎く、最も、世界中の英雄が知られている東京だ。

よし、存分にやってくれ。』

ほかんとする指揮官二人に、開発チームが説明する。

『要するに、我々の霊基を電腦空間内に作ったから、そこに移動して戦うんだよ。』

『まあ、言われるがままやってみるか。』

『そうだな。』

サーヴァント4名端末に触れ粒子となりモニター内に移る。

『それで、どうするんだ？』

『まずは、お互いに拠点を決めてくれ。』

『では、私は新宿駅にする。』

月桂冠の男が言った。

『では、私は、高尾山にしよう。』

チヨビヒゲの男が言った。

『わかった。次にインシユタインかテスラのどちらかを、選んでくれ。』

『では、私はテスラにする。』

チヨビヒゲの男が言った。

『ありがとう、生前から君が嫌いなんだ。』

ボサボサの髪の毛の男が言った。

『わかってているよ。でも、君を無辜の怪物に仕立て挙げたのは、亡命先だ。』

チヨビヒゲの男は、にやりと笑って言った。

『全く、踏んだり蹴ったりな人生だった。』

『さて、別れたところで拠点到飛んで貰う、

これからすることを、二人同じ場所でやるのは、

お互い嫌だろうからねえ。』

『なんだか、わからんがわかった飛ばしてくれ。』

私は、端末を操作し各拠点到飛ばした。

『では、これからヒトラーとカエサルに

英霊召喚をして貰う。』

『はあ。』

2つの場所で同じ反応が帰ってくる。

開発チームはニヤついている。

『言い忘れていた。』

あなた方二人にはこれから令呪を持ったサーヴァント。命名コマ

ンダーとなつて、7騎のサーヴァントを使って戦つて貰う。』

二人の歴史的天才指導者は揃つて大笑いをする

『おもしろいつ！』

『氣に言つてくれて何よりだ。』

では、召喚サークルを用意したので使いたい英霊を教えてください情報ソースをそちらに送つて触媒にする。』

『心得た。』

二人の英雄は、お互いにサーヴァントを私に教え、召喚の準備は、整つた。

『さあ、詠唱してくれ。』

『素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。』

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、

王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

—— 告げる。 ——

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！』

何も、起きない。

『なぜだ、情報ソースはおくつたのに！』

『マスター、私たちを呼んだ時、何か付け足したんじゃないか？』

ボサボサの髪の男が言った。

『そういえば、野望を口走つた。』

二人の指導者は頷いてこう言った。

『ほう、つまりは英霊を同調させる為の言葉を足せば良いんだな？』

『まかせておけ!』』

『歴史に名高い英雄達よ』

『諸君らをつき動かすものはなんだ?』

『金か、名声か、その両方か?』

いや、違うだろうか?』

『生前の野望』

『生前の願い』

『生前に屈辱』

『『それこそが、諸君らの原動力だ。』』

『『さあ、現れる私が、それをかなえてやろう』

勝利という何よりも旨い美酒とともに!』』

召喚陣が演説に反応し光だして

英雄達を呼び出した。

高尾山 山頂にて

先程の詠唱とは、別にバーサーカーの詠唱が済んだ。ヒトラーの前に現れたのは、

紫髪の騎士

赤髪の中国人

汚ならしい髯の海賊

片腕が大きい仮面の男

全身をマントで覆った仮面の男

中華風の鎧の大男だ。

『諸君、さっそく準備に取りかかろう。』

テスラは既に、作業にかかり始めている。

キャスターにも、直ぐに仕事をしてもらうぞ。

ランサーは、私の兵の訓練をしてくれ、慣れてるだろうか?ライダーはテスラの元へ行ってくれ。他の者は暫く待機だ。』

それぞれ、行動を開始させヒトラーはスキルで自らの、部下を召喚した。

『さて、優秀な我が配下達よ』

また、大戦が始まるぞ。準備はいいかな?』

『『『『勿論です。大総統閣下

ジークハイル!ジークハイル!』』』』』

『ふふっ頼もしい限りだ。カエサルよ

サーヴァントだけが、相手だとは思うなよ。

もとより私は、英雄達を囲っている事を忘れるな』

チヨビヒゲの男は嬉しそうにいい放った。

新宿駅にて

カエサルが、呼び出したのは、

白い甲冑の美青年

丸盾の男

大帽子の男

骸の仮面の女

インディアンの戦士

とぼけた顔の提督だ。

次にカエサルはバーサーカーの詠唱に入る

『閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われ

し者。我はその鎖を手繰る者――。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ!

あらゆる世界の境は、今、この時、私が破る

此度の呼び声は、前人未踏の領域へ轟くだろう』

来る。理由はミノタウロスが入り口から出入り出来れば、ミノス王は怪物を閉じ込めた事には、ならないからだ。さらに、コマンダーの命令でミノタウロスは迷宮上のどこへでも出られる。2つの矛盾して聞こえる理論は、孤立系で考える物とする。そして、コマンダーと私は迷宮内を好きに移動できる。理由は、ラビリンズに入り活動するものは、侵入者とミノタウロスのみであり、今ここにいる。我々は、ただの傍観者として迷宮が認識するからだ。』

こうして、カエサルの拠点は完成した。

『これで、ここにいる限り誰も我々に手出しする事は出来なくなつた。存在するはずのない傍観者に、手出しする事は、不可能だからな。ハハハッ』

『なんというか、本当に君は、舌が回るといっただけで、誰よりも恐ろしい事をしでかすな。ここまでの詐欺を目撃したら、もはや呆れるしかないよ。』

『私は、この弁舌だけで、全てを解決してきたからな。さて、アドルフ・ヒトラーは、どうやって、これを攻略するかな。ハハハハハッ』

高尾山 山頂にて

『では、行ってくるでござるよ。』

『ああ、頼むよ。』

今回、君の役割は戦況を大きく左右させる。

期待しているよ。』

『おうよ、この黒髯様に任せておけッ

いくで、ござるよ。テスラ殿。』

『ああ、今いくよ。』

最後の仕上げを、終わらせたテスラと黒ひげが海賊船に乗り込む。

『では、航海の無事を祈るぞ。』

ヒトラーが、そう言うとき海賊船は宙に浮き空を進み始める。

『さて、カエサルよ

私の秘策を楽しみに待っていてくれたまえ。』

二人の天才はお互いに策を弄し、戦いに挑む。
この戦いの行く末を予想出来るものは、恐らくは、存在しないだろ
う。

状況開始から、約一時間二人の指導者は拠点を各々要塞化しお互いに兵を配置した。

コマンドーのクラススキルで生前の軍隊を呼び出せる。出せる兵の総数は最大で1万人。

ローマ兵とドイツ軍人では、武装の違いで通常の戦争ならばドイツ軍の圧勝だが、ここではローマ兵とドイツ軍人の装備の防衛性能、攻撃力は同程度となる。しかし、射程は現代兵器が有利。強さは、300人規模でサーヴァント相手に、殿を勤められる。

ローマ軍は新宿駅周辺地域を厚く守っている。
一方ドイツ軍は積極的に進行している。

最初に動き出したサーヴァントはドイツ軍勢。

大型の海賊船が、SFで見えるようなブースターをつけて空を進んでいる。

『ドゥッフ

流石テスラ氏??拙者の船をよくぞ

ここまで、強化してくださった。なんと大空を進んでいる!』

『君の船は元々、魔力消費が大きいだけで飛べるだろう?私は、スピードを上げたただだよ。』

少し武装もしたがね。』

現在、アン女王の復讐には6000人のドイツ軍が搭乗している。

海賊船は、中央本線上空を進み中野駅まで約10Km地点を航行中。

『しかし、ローマ軍はずいぶん守る地点を絞っているようでござるな。もうこんな所まで来てしまったでござる。』

『何か、策があるようだな。まあ、この船は大抵の事では、墮ちないから安心しろ。』

『テスラ殿がそこまで言うなら、拙者はなんの心配もナッシングでござるよ??。』

野郎共全速前進!』

『野郎共ッ！この黒ひげ様がいる限りどんな荒波にも屈するな！この嵐の航海者についてこい！』

『『『おおおおッツイアイ、アイキャプテン!!?』『』』』
海賊の指揮が上がりパイロットを皆殺しにする。

しかし、爆撃機はドンドン向かってくる。

『おかしいな。』

『なにがだ?』

『爆撃機が多すぎる。大船団で敵がいるのか?』

『恐らくは敵のスキルで無尽蔵に爆撃機を産み出してるんだらう。サーヴァントに心辺りは?』

『少し待て。』

黒ひげは望遠鏡で前方を確認した。

『やはりな、あの俺たちの時代では考えられねえ形の船。空母だ。あれは飛竜!!?拙者も某ゲームではお世話になっているでござる!』

『いいから、真名を教えろ!』

『あれを、見たら誰でもわかるだろう』

敵は人殺し多間丸!山口多間だ!』

『野郎共ッツ速度を出来るだけ落とさずに前進し続けろ!クイーンアンズ・リベンジアン女王の復讐の火力なら空母も落とせる!ボヤボヤしているとパイロットに押し潰されるぞ!』

『『『アイ、アイキャプテン!!?』『』』』

『それと、ドイツ軍を1000人降下させろ。甲板に登らせてパイロットをぶち殺せ!』

『了解です!テストラ製の空挺用装甲車も準備してあります!』

『よし、向かわせろ!』

空挺装甲車はアン女王クイーンアンズ・リベンジの復讐下部から射出され飛竜から2km地点に降下。

ドイツ軍は飛竜に向かって走るが、途中にはナイフが数本刺さっていた。

突如、ナイフから稲妻が走り装甲車を襲う。

飛竜についた頃には、装甲者は7割に減っていた。

700人のドイツ軍は飛竜にロープをかけ登る。登る過程でも稲妻に襲われ、500人となった。

登りきるとドイツ軍の前方にインディアンが一人立ち塞がった。インディアンはドイツ軍の一人に急接近し、そいつの顔を掴んで碎いた。そして、小銃を取り上げて、近くの、ドイツ軍を4人殺しナイフを投げて稲妻を起こしさらに5人殺して叫ぶ。

『私は、訳あってこの船を守る者』

貴様らに、怨みは無いが生前の故あって軍服を見ると血祭りに挙げたくなる。覚悟しろ。』

次々と殺される仲間を見て震えながらドイツ軍人の一人が叫ぶ。
『獅子殺しだー！』

飛竜艦内にて煙草を吹かしながら多聞は一人喋る。

『全く、ローマ兵で充分なのに何故、もう一基』

英霊を配置したんだ。私が負けるはずないだろう。』

飛竜甲板にて

『どうしたッ！ドイツ軍は、この程度か？』

甲板の上のドイツ軍を150人程殺してジエロニモが叫ぶ。

甲板の上のドイツ軍は、一度態勢を立て直すべく

装甲車に撤退した。

ジエロニモは甲板を守るために、下へは降りられない為に敵を挑発し続ける。

暫くすると突如甲板の側面からまたドイツ軍が登って来る気配がした。

『やつと戻って来たか臆病者どもめ』

そう言った途端大量のスモークグレードが投げ込まれる。

ジエロニモは四方に、ナイフを投げて稲妻を起こし、煙を散らす。

すると、今度は手榴弾がジエロニモを囲むように飛んできた。ジエ

ロニモは、それを一部蹴り飛ばし回避しようとした。

ババババツ

側面から小銃が放たれる。ジエロニモは、ナイフで弾を弾き、片側のドイツ軍へ突進する。

するとドイツ軍はラグビー選手のようにジエロニモに飛びかかり動きを止めた。

『小癩なツ！』

ジエロニモは直ぐに振りほどいたが、横を見ると機関銃が2門置いてあるのに気づいた。

『ハハッどうやら失敗したようだな。』

そう言うと、振りほどいたドイツ軍が再び、足にしがみつきニヤついた。

ドドドツ逆側面から、2門の機関銃がジエロニモを襲う。

『がはツツ』

ジエロニモは、少し怯んだがとつさにドイツ軍を拾い上げ盾にし横に走った。

直ぐに、逆側面に到達し、ドイツ軍を屠った。

『こんな事をして、何の意味もないぞ！』

すると倒れたドイツ兵は、

『いや、大いにあつたさ。上を見る。』

そのまま、ドイツ兵は息を引き取った。

甲板のドイツ軍 全滅

ジエロニモは、空を見上げたため息をつく。

『やれやれ、思ったより敵サーヴァントは強力だったな。』

クイーンアンズ・リベンジ
アン女王の復讐船上にて

『ドウフフ』

多聞丸、拙者がたかが、ドイツ軍ごときに

サーヴァントの相手を任せるとお思いか？

そんなはず、無いでござろう。

ドイツ軍が甲板で戦ってる。間なら爆撃機は飛んで来ない！野郎

共ツツ全速前進！』

『『『アイ、アイキャプテン!!?』』』』

何百という爆撃機の残骸を放り捨てつつアン女王の復讐は進んだ。

『今のうちに一気に詰めるぞ！』

ブースター出力全開ツツ！』

猛スピードで海賊船は空を駆け遂に射程内に飛竜を納めた。

『拙者達、案外良いコンビですな〜』

『なんだかんだで、君は誰とでも上手くやるだろう？流石は伝説の海賊だ。』

『ドゥフフ』

拙者、こんなに褒められるのはシリーズ初でござる。野郎共ツ宝具解放だー！いくでござるよ〜』

『クインアンズ・リベンジ
『アン女王の復讐!!』』

飛竜艦内にて

『ほお、案外速いな。あのボロ舟

これに関してはコマンダーに感謝だな』

放たれた大量の砲弾は稲妻によって防がれた。

『この私の工房でもあるこの船に砲弾なんて効きはしないぞ！』

大量の骸の上でジエロニモは嗤う。

『だから、拙者達が一緒にいるでござるよ。』

テスラ殿、秘密兵器をお願いするでござる。』

『了解した。ドイツ軍に持たせたスキャナーで解析したデータを元に飛竜の周波数を計算した。』

この震動現象発生砲で飛竜を破壊出来る。』

『『震動砲発射!』』

『馬鹿な、ただの物流現象で私の宝具である飛竜が破壊出来るとも?』

『だから、アン女王クインアンズ・リベンジの復讐に搭載させたんだ。だから、ドイツ軍を温存したんだよ。私の震動砲は黒ひげの宝具の概念を強化しているに過ぎない!』

飛竜が強烈な震動を発生し自壊していく。

少しずつ、ガガガッギイーと音を立ててひび割れるその様は、まるで龍が哭いている様だった。

『なんだと!』

私は、また負けるのか？だが、ただでは終わらんと！宝具解放

固有結界 「r b：散華するまで咲き誇れ我が愛娘 >バトル・オ

ブ・ミッドウエー」！』

辺りを包むように光が放たれた後に大海が現れた。

さらに、飛竜1隻だった船が4隻に増えている。

赤城、加賀、蒼龍、飛竜から一斉に艦載機が飛び立つ。

『全機、突撃ッッ！』

『『『大日本帝国に栄光あれエエ！』』』』

空を包む程の戦闘機がアン女王の復讐を襲う。

『飛竜、何度も失敗してすまん。』

だが、お前と一緒に散れるのだけが私の救いだ。

最後に、敵と相打っただけ、今回は許してくれ。』

クイーンアンス・リベンジ
アン女王の復讐船上にて

『ふおおおおお、やったと思っただらなでござるか！死ぬ！死ぬ！』

『ダメだ、持ちこたえられない。不時着するッ！』

海賊船は海面に勢いよく落ちた。

『ヤバかった。下が海に変わって良かった！』

暫くして、固有結界が解除され、無事着陸。

『よっしやあ！生きてるぞおおお』

『『『おおおおおおおッッ！』』』

『しかし、これでは、暫く飛べんぞ。』

『安心しろ。サーヴァント一基は逃がしたが、ドイツ軍1000人の犠牲でサーヴァント一基倒したんだ。上々の戦果だろう。俺たちは、強行偵察なんだからな。』

『それも、そうか。いずれ主力が我らを追い越して敵の拠点に攻め入るだろう。ここは、ちょうど良い前線基地にもなった訳だな。』

『拙者達のコマンダーは恐ろしい男でござるな??』

『全くだ。』

飛竜の瓦礫にて

瓦礫は、多聞丸の上に落ちる事はなく、彼の周りを包むように落ちていた。

『最後まで、私を守ってくれたのか・・・』

ガタンッ瓦礫を押し退けてジェロニモが多聞に近寄って行く。

『ふう、危なかった。それで、どうする？ 奴らのどちらかとなら相討てるんか。』

『いや、止めてくれ。君は主力と合流しろ。』

『そちらは、もうダメそうだな。』

『ああ、せめて最後は、静かにこいつと眠らせてくれ。』

『わかった。』

だが、最後に言わせてくれ、我々、先住民の中には強者の心臓を喰らい自らを強くする一族がいる。

この飛竜が強かったのは、君と言う心臓を腹の中に納め続けていたからだろう。私が見た軍人の中で君は、最も勇敢で恐ろしい戦士だったよ。』

『ふふっそりやあ』

どうも、ありがとう。行く前に一服付き合ってくれるか？』

『もちろんだ。我々は煙草は太陽から貰った物と考えている。君の国の旗の前で最後に恩恵に預かろう。』

二人は、黙って一服し、ジェロニモは黙ってその場を去った。

『飛竜よ、せつかく守ってくれたのにすまないな。』

ライダー 山口多聞 消滅

高尾山ドイツ軍拠点にて

『さあ、カエサル先手を取ったのは、私の方だぞ。どうする。』

新宿駅迷宮にて、

『わかってないなヒトラー攻めるだけでは

近隣の小国は倒せても大国は倒せないぞ？

お前が負けた国よりもローマは広い。

さあ、また同じ失敗を繰り返せ。』

ティーチとテスラは、飛竜があった中野駅の周りを占拠し女王アンへの復讐を前線基地として、完成させた。ヒトラー軍勢は順調に攻略を進めているように思えた。だが、この状況を見て嗤う者いた。

ユリウス・カエサルだ。

『我が軍の主力は、中央自動車道を順調に進軍しているようだな。』

『はっ。現在、八王子市内に到達しました。』

『よし、フフツ』

ヒトラー、お前は私が、新宿駅を選んだので列車を使うと踏んだのだろうが、私が駅を選んだ理由は別にある。お前の大型前線基地は、またしても迂回されたな。ハハハハツツ』

『しかし、ライダーを早々に失ったのは、大きな痛手だ。これで、我が軍は、制空権を完全に奪われたも同然だ。何か、策を考えねば。』

中央自動車道、八王子市内のどこかにて

『いやあ、トラックは実に良いこんなに行軍が楽だとは。』白い甲冑の美青年は機嫌良さそうに言った。

『全くだ。』

大帽子の男と丸い盾の男もかなり上機嫌だ。

『このまま八王子JCTを占拠して、後続を待つのは、少し、つまらないですね。我らだけで、充分でしょうに。』白い甲冑の美青年は愚痴をこぼした。

『そう言うな、指揮官の判断は兵士の想像を大きく越える。俺も、そういう作戦をいくつも考え、部下の事務官の頭を悩ませた者だ。』

大帽子の男は楽しそうだ。

そのまま、順調に八王子JCTに到着すると、思いきや、数キロ先の軍勢に大帽子の男が気づいた。

『おおっすごいな大量のデカイ大砲が道路塞いでるぜ。』

『・・・不味くないですか?』

『落ち着け、一掃出来る。』

— 凱旋を高らかに告げる虹弓 《アルク・ドウ・トリオンフ・ドウ・

そして、直ぐ様子を投げつける。ガウエインはかろうじて剣で受けたが、着地の直前、突進してきた呂布がガウエインを蹴り飛ばす。

ガウエインはそのまま地面に直撃した。呂布は矛を拾い上げ構えて攻撃を待った。

『ガハッ』凄まじい衝撃がガウエインを襲った。

だが、ガウエインは立ち上がってこう言った。

『強い、しかし、私は、これから強くなる一方ですよ！』

ガウエインは剣を振ると炎が飛び出し呂布を襲った。しかし、呂布は、微動だにせず構えている。

『目眩ましにすらなりませんか、ならばひたすら切りつけるのみ!!?』

両者は再び鈍い音を立てながら剣を交えた。

攻防は、30分程、続き、当初、押していた呂布が少し押され始める。

すると、上空を、鳥の大群が覆い、呂布の後方にある戦車の残骸に何かを落とした。

『いったい、何が起きている!?!』

戦車の残骸は片腕が大砲のゴーレムに姿を変えた。ゴーレムは横並びになり、ガウエインの後方にあるトラックへ一斉に砲撃を開始する。

『不味いッ』

トラックに砲弾が降り注いだ。しかし、トラックは既に無人だった。トラックの後方から、丸盾の男を先頭に、7000人のローマ兵が、姿を表す。

『よくぞ、耐えてくれました。』

丸盾の男はガウエインに礼を言うと、こう叫んだ。

『「rb:炎門の守護者 >テルモピュライ・エノモタイア」アアアッ！』

突如3000人のスパルタ兵が現れた。

『総員、突撃イイイイ！』

『『『ウオオオオオオオオオオ!!』』』

3000人のスパルタ兵と7000人のローマ兵がガウエインを追

閃光が、カエサル陣営の3名のサーヴァントを襲い、戦闘があった場所は、大量のゴーレムと呂布の破片が道路と共に崩れて飛散していた。戦闘が終わったそこには、ヒトラー陣営のサーヴァント、アヴィケブロンがいた。

「よし、いいぞ。呂布の霊基は計算道理かろうじて、この場に残っている。ゴーレムの破片はいい具合に、あたりに降り注ぎ、アスファルトの上を覆っている。あとは・・・」

アヴィケブロンが振り返ると、ドイツ軍の戦闘機30機と戦車70両がアヴィケブロンの本へ向かってきている。そして・・・

「大総統閣下の部下、ルーデル殿、ヴィットマン殿、ドイツ軍を率いて無事到着しましたぞ。」

片腕が大きい仮面の男は、少しやり切った顔でアヴィケブロンに話しかけた。

「ご苦勞、大総統閣下の部下たちが無事にここまで辿り着けたのは、君のおかげだよ。これからも、活躍を期待するよ。」

「いえいえ、それほどでも、私に出来ることならば何なりと、即座にかなえて見せましょうぞ。」

「では、頼むよ。」

そういうと、アヴィケブロンは、手に持ったトランシーバーでコマンドーに連絡した。

「アサシンが、こちらに着いた。計画通りやってくれ。」

ある場所をにて

「わかった。」

令呪によって、命じる。アサシンよ、自らの呪腕を切り落とし自害せよ。」

ここまで、カエサルは拠点を最大級に堅め、3騎士を大軍と共に、敵拠点に向かわせたが攻勢は、失敗に終わりサーヴァントも、3騎失っている。

一方、ヒトラーは大型全線基地を敵拠点の目前に構え、サーヴァント2騎を犠牲に超弩級兵器を製造し、生前の精鋭と共に敵拠点に向かわせた。

これだけを、見ればヒトラーがかなり有利に思えるだろうが、本よりローマ軍は、自分達の拠点を絶対的有利にし、降りかかる火の粉を直ぐに払えるようにドイツは、大鑑巨砲主義に基づく兵器を製造し、高火力で敵を討ってきた。つまり、現在の状況は、どちらも、生前の得意戦法を整えた段階に過ぎない。ここからが、両軍コマンドーの腕の見せ所である。

「new page」

現在時刻 午後4時

女王アンへの復讐にて

『いや??、敵サーヴァントはおろかローマ軍すら攻めて来ませんか??。修理も完了した故、拙者超絶暇ですぞ??。オラッ!出てこいやローマ軍!!?』

ハイハイ、ピッチャービビってる!

みんな、一緒にッ!』

『『『『ハイハイ、ピッチャービビってる!』』』』

『やかましいッ!』

『ですが、テスラ氏ここに、誰も攻めてこないのは、戦略的にも不味いですぞ』

『案ずるな、自動車道の方は此方の大型兵器が攻勢を仕掛けてきている。』

『マジでツツ!?超見てええ!』

『それに、そろそろ此方の主力が到着する。』

少し、遅い気はするがな。』

そうテスラがいい終わると同時に、突如、黒ひげの腹部から刃の先端が顔を出した。

『ハハハツ他愛なし!!?』

『痛ってえええ! 何事だ!』

『いや、普通腹を刃が貫通したらもつと慌てるだろう。』

『拙者、この程度日常茶飯事でござる故

ああつヤンデレ美少女にだったらいいのに!』

『私を無視して、談笑するなッ』

『やかましいッ』

バゴツ黒ひげのメリケンサックがアサシンの仮面に直撃し、アサシンがよろけると顎にもう一発決め、気絶したところを、拳銃で撃ち殺した。

『容赦ないな。流石、海賊』

『いやいや、それほどでも?。』

しかし、いくらなんでも弱すぎるぞ。

野郎共、周囲を警戒しろ! ドイツ軍も展開させろ!

『『『アイアイ、キャプテン!!?』』』』

『また、ザイードが調子に乗ってやられたぞ。』

『そのうち、即死のザイードって呼ばれるぞ。』

『犬死のザイードかもな。』

『まだいるか、ハアツツ!』

テスラが周囲に放電するが回避される。

『不味いな、こんな大所帯で複数のアサシンに入られると、流石にしんどい。野郎共、漫画で読んだろ! 伍を作れ!』

『『『アイアイ、キャプテン!!?』』』』

『漫画で、戦術を学んでいるのか?』

『最近の漫画は良くできてるから大丈夫でござる。それに、海賊の戦いかたじゃ被害が大きい。』

『くっ! こぎかしい。さあ、こつちだ。こつちにこい。』

『アサシンごときが、いい度胸だな。うわっ!』

突如、黒ひげの手下の足元が崩れ数名船内に落下する。

『おい、なにやってんだ。このば・・・』

海賊の頭に弓矢が突き刺さりバタツと倒れる。

『お頭ッ！ドイツ軍がいる部屋で謎の香が充満しています！ドイツ軍動けません!!?』

『落ち着け、今ここにいる奴らは、ここに固まれ!』

『『アイアイ、キャプテン!!?』』

『バカめ!いい的だ。』

『当たり前だろ。誘き寄せる為の餌なんだから。』

『なに!?!』

突如、現れたアサシン2名を海賊が3人係で抑え、残り2人が切りつける。

『バカが、お前らなぞ我らの相手では、無いわ。』

『当然よ、俺が一人つつ殴って行くまでの時間稼ぎだからな。おらよっ!』

黒ひげの一撃でアサシンは顎を砕かれ、気絶したところを海賊が5人係でボコボコにする。

『蛇香と汚泥がやられたぞ。奸計どうする?うわっ!』アサシンの額を拳銃の銃弾が貫く。

『おい、何人もいるからといって簡単に死にすぎだ。全員、一撃当てたら逃げろ。攪乱させれば、適当に攻撃しても敵は死ぬ!』

『『了解!』』』

『くそっ!風弓と一緒に遠見もやられた。』

油針、薬師、虫飼出番だッ!』

『『承知した。』』

『うあああ、何かの薬品をかけられた。熱いッツ』

『おい、ヤバイぞ水をかけても消えない。服を脱げ!!?うわっ!』

『なんだ、針が刺さったら死んだぞ!』

『おいつ気をつける蜂の大群がいきなり現れた。』

『海賊達、落ち着け!これならどうだ!』

ボンツツという音を立て船内の一室が爆破した。

『ラツキーだったな。可燃性だった。海賊達、毒香はこれで、吹き飛ん

だ。武器庫に言つてドイツ軍の武器をもつてこい。』

『了解しました!!?』』

『そうは、させるか!』

『やはり、出てくるんだな・・くらえッ!』

テスラの放電でアサシンが、3名死亡。

『しかし、厄介だな。こいつらを指揮してる奴は、攻撃してこないから、気配遮断が解除されない。どうする?』

『どうせ、船は又壊れたし近くのアサシンを一掃するか。野郎共、船の周りに、油と酒樽ありつたけ放り投げろ!』

『アイアイ、キャプテン!!?』』

船の周りを囲むように、油と酒が撒かれる。

『テスラ殿!』

『任せろ!』

テスラの放電で辺りが火の海になり数名のアサシンが燃えながら、姿を現す。

『これで、全員か?』

『思ったより、人数が少ないな。』

火の海の中、アサシンの一人が叫ぶ。

『ふははははははッ!』

貴様らの邪魔をすることのみが、我ら、別動隊の役目よ。お前らの所にいる。ドイツ兵は全滅し、船も大破した。我らの役割は達成したぞッッッ!』

そう言うアサシンは燃え尽きた。

『やれやれ、してやられたでござるな。』

主力の方々の健闘を祈るでござる。』

中央線テスラ性装甲列車内

『いいぞ、黒ひげは最高の場所に前線基地をおいてくれた。各員戦闘準備を整えておけ。』

『了解ッッ!』』

ヒトラーが拠点を高尾山にしたのは、

駅から近く尚且つ東京都内のみこの戦場では、

新宿駅から、直通で最も遠いからだ。

ヒトラーは最初から、列車を拠点としようと計画し、高尾山山頂には、テスラ製品を無限に稼働させ続けるための、送電施設のみを置いている。

カエサル軍は、ここまで進行されてしまつては、もはやヒトラー軍を殲滅しきらなければ高尾山には行けず、ヒトラーの攻勢を止める事は事実上不可能となつた。

と思われたが・・・

突如、線路上に大きな扉が現れた。

新宿駅迷宮にて

『列車ごと、ラビリンスに閉じ込めるのか?』

カエサルが、きよとんとした顔で聞いた。

『いいや、違う。私はラビリンスからの出入りは、ミノタウロス以外は一方通行しか出来ぬ様に設定した。列車が、扉に衝突しても列車は動きを止められない。衝突したエネルギーが扉に伝われば、ミノタウロスが出ようとした扉から何かが入ることになる。それは、私が立証した理論ではありえない。』

詰まり、列車から扉に伝わるはずの運動エネルギーは、回折し扉を避けるように両側から前方へ流れ出す。すると、列車は前から後ろまで全て潰れるまで止まらない。乗員は全滅だ。』

『最も効率的で残酷な手段だな・・・』

『君がそう命じたのだろうか?』

『君を選んでおいてよかつた・・・』

中央線テスラ製装甲列車内

『おい、何か出てきたぞ。どうするコマンダー。』

『こうする。』

ヒトラーは持っている端末で列車を思いっきり右に反らし、扉を避けた。だが、脱線した。列車はガタガタと音を立てながら転がっていく。

『そしてこう。』

ヒトラーがボタンを押すと列車が宙に浮いた。

『なんでも、ありだな・・・』

『無限にエネルギーを供給出来るからどんなに、エネルギー効率が悪
かろうと、実現できる。』

列車の下にある線路上の扉が開きミノタウロスが、現れる。

『出たぞ、サーヴァントだ。どっちがいく?』

『呵呵ツツここは、公平にじゃんけんで決めるか』

『よし、では始めるか。』

『『じゃんけん、ポンツ!』』

紫髪の騎士は拳で赤髪の中国人に殴りかかるが、それを、赤髪の中
国人は払い、掌底を紫髪の騎士の胸に当て、紫髪の騎士を吹き飛ばす。

『お見事、ガハツ』

『では、いくとするかのう。』

赤髪の中国人は列車から飛び降りて、そのままミノタウロスの角を
槍で突き片方の角を砕く。

『アアアアツツアアアアツツ!』

ミノタウロスは激昂して赤髪の中国人に斧を降り回しながら、突進
する。

赤髪の中国人は、斧を槍で払い、横に避けてミノタウロスの脇腹を
槍で突き、ミノタウロスを吹き飛ばした。吹き飛びながら、ミノタウ
ロスは、片方の斧を赤髪の中国人に向けて投げるが、難無く回避され
る。

『呵呵ツどうした、その程度か。』

『ウウツアアアア!』

ミノタウロスは巨体を全速力で動かし、突進する。赤髪の中国人は
避けようとしたが、体をミノタウロスが片腕で掴み。止まると持ち上
げて

『恐いか? 恐いよなー? 喰われるもんなーツツ!』

ミノタウロスがそう言うと、赤髪の中国人は手刀でミノタウロスの
指を切断し、抜け出して、ミノタウロスの足を槍で突き、転倒させた
あと、ミノタウロスの腰を思いっきり槍で貫いた。

『アツツアアアアアアアア!』

暴れるミノタウロスから飛び降りて、立ち上がれぬミノタウロスの頭を一突きで砕いた。

バーサーカー ミノタウロス消滅

赤髪の中国人は余裕の態度で、仲間に安全を伝えようと後ろを向き歩き出す。

すると、ミノタウロスが出てきた扉より、大量のテラが赤髪の中国人に向かって投げつけられる。

『何故だ、この扉はあの怪物の能力では無いのか!?!』

赤髪の中国人は、とっさに避ける。ローマ軍のテラは扉の奥から、投げられているので、扉の前方にしか飛んでこず、難無く避ける。

『ランスロット、ドイツ軍、新手だ降りてこい。』

新宿駅迷宮内

『まさか、あのサーヴァントがあんなに強いとはな。神話の怪物を単騎で圧倒したぞ。』

『座に登録されているのだから、あのくらいは、想定内だ。現代の英雄を舐めて掛かると痛い目を見るぞ。』

『確かに、君も現代だしな。だが、なぜ迷宮が消えないんだ?』

『この迷宮と新宿駅は量子ねじれで繋がっている。新宿駅と迷宮は、形は違うが完全に繋がっているんだ。新宿駅を消滅させない限り、迷宮は残る。』

ミノタウロスが死んでも開門能力と閉門能力を失うだけだ。』

『そうか、想定より良くできているな。私の拠点は、では諸君頼むよ。』
『任せろ。』

『やれやれ、私は又そうそうに戦死しそうで気が進まないな。が、今回は君に従おう。』

『ああ、頼む。』

中央線ラビリンスゲート前

『行くぞおおお!!?』

『『オオオオオオ!!?』』』

扉から、三人の男とローマ軍、2万3千人が現れる。

『なんだ?!なぜ、あんなに大軍が?兵士は1万までのはずだ!キャ

スターの報告では、我が軍は貴様の軍を既に7千人倒しているはず！』

『私のスキルで生前の友人を呼び出した。』

貴様の独裁と違い、私の頃のローマは政治三頭だ。私と同じ様に、このポンペイウスとクラッススもコマンダーだ。では、行くぞ。』

装甲列車に向け2万3千のテラが投げられる。

『不味い。落ちるぞ！総員対ショック体制！』

不時着した、装甲列車にローマ軍が押し寄せる。

一番槍で、ポンペイウスが装甲列車の壁を粉碎する。そこをランスロットが待ち受ける。

『簡単には、入らせないぞ！』

ゴンツツランスロットの後頭部を突如現れた仮面の巨漢が殴り付ける。

『もう、入ってるぞ。』

『なにッ!?!』

『令呪によって命じる。怪腕のゴズール』

その怪力を持って不貞の騎士を粉碎しろ。』

『御意』

『誰が、不貞の騎士だ！アサシン一人に負けるか！』

『一人ではない。』

高速の影がランスロットの脇腹を切りつけた。

『令呪によって命じる。迅速のマクール』

その高速を持って不貞の騎士を即座に切り刻め。』

『御意』

『だから、誰が、不貞の騎士だ！くそっ！』

ランサー援護頼めるか?』

『こちらも、数が多くてな少し手間取っている。』

まあ、3千人程しか打てていない。おっと、いいところにいる。覚悟ッ！』

『なにッ！待てッ！』

赤髪の中国人の拳がクラッススを吹き飛ばす。

『うわああああ！くそっ又、私だけ早死にだな。』

今回は、少しは君を助けよう。

令呪を持って命じる。何処かにいるセイバー勝利せよ。重ねて、令呪を持って命じる。何処かにいるキャスター勝利せよ。重ねて令呪を持って命じる。アサシン、勝利せよ。ローマに栄光を、ポンペイウス今回は裏切るなよ？ははッツ・・・』

コマンダー クラッスス 消滅

『任せておけ、クラッスス必ず勝利する。』』

『くそっコマンダーを潰しても、数は減らないか！』

『当然だ、クラッスス亡き後も私は国を納めたからな。さあ、どうするヒトラー？』

『私には、まだ奥の手があるのでな、この場は持たせるだけでいい。』
『令呪を持って命じる。ランサー、二の打ち要らずの異名を森羅万象に証明せよ！』

『承知した。』

二人の指導者の戦いはいいよ、本格的に始まった。この行く末は、未だ、誰も知らない。

ヒトラーとカエサルが合間見えるなか、

中央自動車道から新宿駅に向かったアヴィケブロンとドイツ軍が、遂に新宿駅に到着した。

現在 午後3時

『とりあえず、ここを丸ごと破壊すればいいのかな？やれ、ヴィルヘルム！』

アヴィケブロンを肩に乗せた超大型のゴーレムが、巨大な矛を振り上げようとした、その時

『そうは、させませんよッ！』

下で待ち構えていたガウエインがゴーレムの足を炎を纏った刃で切り払いゴーレムの右足を切断した。

だが、切れた足は即座に回復し始める。

バランスを崩すかの様に思われたゴーレムは、背中にある12の翼で飛翔した。

『無駄だよ、このヴィルヘルムは例えセイバーと言えど、単騎で撃破出来るような代物では無い。』

もつとも君は、下のドイツ兵にすら勝てないがね。ルーデル、ヴィットマン頼んだよ。』

『部隊長の仰せのままにッ！』

ダダダダッ上空から機銃がガウエインに向かって放たれる。ガウエインがそれを避けると、着地を狙って戦車の砲弾が放たれた。その瞬間を狙って地空から、一斉掃射された。

『この時間の私を甘く見ないでください!!?』

ガウエインが剣を振りながら回転すると辺りのドイツ軍が炎に包まれた。そうとうなダメージを負っているはずのガウエインは無傷でいた。

辺りのドイツ軍は灰塵とかしガウエインの回りは鉄の枢が溢れていた。

『ドイツ軍は、破りましたよ。』

最後の力を全て注いだ一撃を放った。

『そんなッツ！』

『くそ、ここまでか・・・』

大口径のビームが二人の英雄を焼き払いそのまま新宿駅に直撃し爆発した。

そして、攻撃を放ったゴーレムも落下して砕けた。その手の中で既にアヴィケブロンは消滅していた。

セイバー ガウエイン

キヤスター ジェロニモ

キヤスター アヴィケブロン 消滅

ミノタウロスを既に失っているラビリンスは、中心部の新宿駅を破壊され、その機能を消失させた。

迷宮内に残っていたアインシュタインもカエサル達の戦場に姿を表す。

一方、女王アンへの復讐では、焼失と爆破で破損した部分を修復し、敵拠点、破壊の報告を受けヒトラー達の戦場に向かった。

激しい戦乱の中、突如としてアインシュタインが現れる。同時に、先程まであった扉が消滅した。

『まさか、拠点が破壊されるとはッ！』

総員に告ぐ。我が軍は、現在、岐路に立たされている。ここで死ぬか。ローマが勝つかだ。諸君、どちらが、良い？』

『『『ローマに、勝利を!!』』』』

『よろしい、ならば即座に目の前にいる有象無象を殲滅せよッ！』

『諸君、我が軍は、数の上では圧倒的に不利と言える。だが、それがどうした？生前もそして、今も我らは、変わらない。己の全力を持って祖国の敵を排除することのみを、考えろ！回りの敵を見ろ！古代ローマ軍だ。時代遅れの武器で戦う蛮族だ！我々はそういう敵に対していつも、技術を持って圧倒するだろう？今回もそうだ！やることは、変わらない。ならば、『r b : L O S ! L O S ! L O S ! > 前進し続ける』ッッ！』

『『『ハイル・ヒットラーッッ！』』』』

二人の指導者は、ここで勝敗が決すると踏み同時に、スキルを発動する。

『『これぞ、自らが勝ち取った権威の証』』

『『国是のカリスマ発動ッッ！』』』

両軍の士気が最高潮となる。

ドイツ軍は、李書文に次々と襲いかかるローマ兵を、機関銃で撃ち抜いていく。ローマ兵は、負けじとテラを投げつけるが、ドイツ軍は、機関銃を、捨てて列車内に退避すると、内側から手榴弾を投げつける。だが、李書文はそんな攻防には、目もくれず何十回と空を突いている。『ランサー何をしているッ！』

ヒトラーの憤慨に李書文は

『先程、令呪を使われてから回りの者全てに線と点が貼り付いて見えるようになった。そうしたら、透明な人型が辺りに何十と見えたから退治している。恐らくアサシンだ！』

『なに？線と点？』

ヒトラーは、何の事かわからないといった顔で言う。

『とにかく、アサシンを倒しているんだな？』

ならば、その調子で倒してくれ。』

『了解した。』

『ランスロット、そちらの様子はどうか？』

『もういないぞ』

敵セイバー ランスロットはこの怪腕のゴズールが討ち取った！』

『『うおおおおおおお！』』』

敵兵は、高揚しドイツ軍に襲いかかる。

セイバー ランスロット 消滅

『不味い、李書文そっちのサーヴァントは片付いたか？』

大量のローマ兵の骸をあつという間に築き上げたランサーは笑いながら

『呵呵ッこちらは、あらかた片付いたかそれに見ろ！』

李書文が石をゴズールに投げつける。ゴズールは、令呪で強化されていると慢心し避けもしない。

石が、ゴズールに命中するとゴズールは内側から弾けた。それを見たマクールは啞然として固まる。

そこに、李書文は拾った剣を投げつける。マクールに剣が突き刺さると、マクールは即死した。

『なんだ、今のはツツ!？』

ヒトラーだけでなく、それを見ていたカエサルも酷く驚いた。

『この空間では、私の宝具が常時発動している。』

つまりは、全てが論理的に解決される。

ヒトラーの命令で李書文は、一撃必殺であることを世界が認証した。その結果、李書文にこの世界の絶対的な生殺与奪件を与えた。直死の魔眼をだ。

早く何とかしないと伝説の拳法家が味方を皆殺しにするぞ。』

『なんだか、わからないがもうすぐ援軍も到着する。全力を持って敵兵を殲滅しカエサルを倒せ！』

『承知したッ』

李書文が残りのアサシンを潰しきった。

百貌のハサン 消滅

そこへ、ポンペイウスが兵を引き連れて襲いかかった。

『そこまでだ！』

ポンペイウスが李書文に切りつける。

李書文はそれを裁き槍でポンペイウスを突く。

ポンペイウスは槍の柄を蹴り上げてそれを防ぎ、

体勢を立て直すと槍が突けぬように突進した。

李書文が、距離を取ろうとするがポンペイウスは李書文の腕を掴んで引き寄せ思い切り頭突きした。

そして、さらにそこに後ろからローマ兵5人が槍を李書文に突き立てる。

『ぐあッ』

李書文は、嗚咽を漏らすが槍が刺さって自らの体が後ろに刺さらない事を良いことにポンペイウスの点に思い切り手刀を突き刺した。

そして、刺さった槍を掴んでへし折り後ろのローマ兵を一蹴して線をなぞり両断した。

『うっああ、くっ、はあっ、かっつ』

カエ・サル・すまない借りを返したかったが、

力不足だった・ぐはッ』

ポンペイウスはそのまま息を引き取った。

コマンダー ポンペイウス 消滅

『良いんだ、ポンペイウス良くやってくれた。』

『カエサルよ、こちらの援軍も到着したぞ。上を見ろ！ここでチェツクメイトだ。』

『いや、まだまだよ。アインシュタインッ！』

『ああ、わかってる。』

アインシュタインが手を上げると上空の海賊船は、空中で内から広がる様に爆発した。

ライダー エドワード・ティーチ

アーチャー ニコラ・テスラ 消滅

『何が、起こったんだ!』

ヒトラーは叫ぶ。

『こちらの、アインシュタインはどうか知らないが、私の居た世界では私は「r b・物質」> エネルギー」を操る怪物扱いされていた。無辜の怪物という奴だよ。』

『お前の居た世界?』

『ここより少し未来では、「r b:異間帯」> ロストベルト」と呼ばれている。英霊の座は時間を超越しているからな。どこかの誰かが繋いだ縁で他の次元と繋がったんだろう我がマスターは、運が良い。それを私の宝具で安定させミノタウロスも呼び出した。』

『なんの、話をしているんだ!?!』

『わからなくてもいい、生前からそうだった。』

さて、ランサーを始末すれば詰みだな。よつと。』

アインシュタインが李書文に石を投げつける。

李書文はそれを避けたが、李書文の横でそれは、爆発した。

『通常なら、石ころ一つでこの場全員を吹き飛ばせるが、ランサーによりダメージを与えるために凝縮させたよ。どうかな?』

『くツツ』

李書文は爆発した瞬間エネルギーの点を突いて回避した。

『面白い、君は事象の地平線と言う訳だな。』

エネルギーすら押し潰せると。だが、エントロピーはその場に残っている。エネルギーがそこにあつた証明だ。それにより私のスキルで時空連続体を少し前で固定できる詰まり。』

李書文の横に光弾が発生しその場にとどまった。

李書文はそれをかわしアインシュタインとの距離を詰めようとする。

『李書文よ、最後の令呪を持って命ずる勝利せよ!』

『心得たツ!』

『無駄だよ。空間にある2分の $e \parallel mc^2$ 乗×無限のエネルギーすらも私は、操れるからね。』

李書文の顔を光の壁が遮り、両側から光弾が放たれる。李書文は壁の点を突き固定されるまでの一瞬で通り抜け回避した。そして、落ちていた剣をアインシュタインに投げつけた。

剣は投げると直ぐに爆発し、李書文を襲った。

『もう、少しだアアア！』

李書文はそれを無視する様に直進し、アインシュタインを槍で突く。持っている槍が爆発した。

だが、李書文はそれを承知しており横に飛んで、その閃光を目眩ましとしてアインシュタインの横腹を手刀で突き刺した。

『うああああ！だが、詰めが甘かったな。』

カエサル！』

『任せろ。冥府への道を振り返り我がもとに馳せ参じよ！アインシュタイン！』

消滅仕掛けたアインシュタインの霊基はカエサルの前で再生した。

アインシュタインを追って李書文が手刀を再び繰り出そうとするが、李書文の腕が破裂した。

『なにッッ！』

『無駄だよ、君と闘ったのは令呪を使いきらせる為だ。エーテル体であるサーヴァントはいつでも破壊出来る。』

アインシュタインがそう言うと言うと李書文とヒトラーが、四散した。

コマンダー アドルフ・ヒトラー

ランサー 李書文 消滅

『これで、やっと終わったな。』

『ああ。では、去らばだ。』

『なに？』

コマンダー ユリウス・カエサル 消滅

『マスター、計画通りだ。私を、計算に入れないために、こちらの数を1騎多く設定してくれた事に感謝する。両軍とも不正に気付かなかったがな。』

『それほど、激しい攻防だった。』

『いえいえ、あなたと共にでなければ根源へ至れ無いので。では、呼び

戻します。』

アルバート・シヨーペンハウアーは端末を操作し現実へアインシュタインを呼び戻す。

さあ、ここから歴史が変わる人類は今、さらなるパラダイムシフトを迎える。私は成功したんだ！

激しい戦いの末に、2人の天才はモニターの中に発生した聖杯を見つめる。

「では、アインシュタイン宝具を発動させ、電腦空間にある聖杯を取り出してくれ。」

「承知した。」

神話の時代を斧が砕き 「[r b :自然 > かみ]」の在りかを知識が覆う。

私が求めた世界の真理、他に阻害され掴めなかった真の世界の在り方は、時空を超えて証明された。

その証明の根拠とは、「[r b :すべてが解つた理想の宇宙 > ゴース・アイニコンステイルリー]」

アインシュタインが宝具を発動し、端末を捜査して物質転送装置を起動させ聖杯をこの場の出現させた。

「素晴らしい、遂に私のいや、全魔術師の望みが叶う。」

「根源への到達は、物理学者の夢でもある。なにせ、世界の真理を見ることだからな。」

「では、聖杯に接続して根源へアクセスしよう。」

ショーペンハウアーが端末を操作しようとする、どこからともなく煙草の匂いが漂ってきた。

2人が後ろを振り向くと、そこには何時の時代の物かよくわからない甲冑に赤いフードを付け短機関銃を持った男がいた。

「君たちは、今、根源へ到達しようとしているね。最初は成功すると思っていなかったからただ見ていたが、

まさか、異世界のサーヴァントを呼び出しているとはね。ちょうど一服しようとしたときに聖杯を呼び出すなんて、タイミングが悪いな。さつきと終わらせたいし、ここで死んでもらうよ。」

「突然、表れて何を言ってる？銃なんかで魔術師をやれると思っっているのか？キャスターツツ！」

「私の宝具が発動している状態では私は無敵だ。」

「アインシュタインが銃と甲冑を爆破させようとするが何も起きない。」

「何故だツツ！何をした！」

「[「r b：固有時制御 > タイムアルター]」、時間を固定するんだ。時間が進まなければ、どんな物理現象も発生しない。」

「君の力では僕を倒せない。」

「そんな、馬鹿な。だが、これならどうだツ！」

「アインシュタインは空間のエネルギーを取り出し無数の光球で抑止力からの使者を攻撃した。」

「だが、抑止の使者は持っていたナイフで光球を切り裂き回避した。」

「また、直死の魔眼か!？」

「そんなに、何人も持つてて堪るか！単に魔術を打ち消しただけだ。ナイフで処理しきれなければ無意味な代物だよ。」

「そう言うとアインシュタインは再び無数の光球を生み出した。今度は、先ほどより多く。」

「そして、抑止の使者の足元の爆破して怯ませるとドーム状に展開した光球を一斉に放った後に、光の壁を出現させ、抑止の使者を閉じ込めて、少しずつ光の箱を縮めていった。」

「これで、お終いだ。」

「抑止の使者を倒したと思ったその時、光の壁を切り付けて抑止の使者が現れる。」

「危なかった、[「r b：固有時制御 > タイムアルター]」を使ってあの数を捌くのは苦勞する。さて、もう気が済んだだろう？」

「これで終わりだ。」

「抑止の使者は短機関銃でアインシュタインでを撃ち殺した。」

「キヤスターー アインシュタイン 消滅」

「うああああああああああ、アアアツ！何故だ!？何故こんな事をツ！こんな事をしてお前に何の得があるっていうんだツ！」

「得なんてないさ、ただの仕事さ」

「何故、私を殺そうとするんだ。誰が仕向けた？」

「いいか、落ち着いて聞いてくれ君は、そう、知りすぎたんだ。私を仕

向けたのは、世界だ。」

「世界？」

「そうだ、本来なら、こんな説明はしないが何も知らぬ子どもを殺すのは気が引けるのでね。」

魔術師が根源に到達するのは、この世界にとって危険と認識されるんだ。だから殺す。いいね？」

抑止の使者は顔を隠してわがりにくい悲し気な顔をしながら優しく諭すように言った。

「ふざけるな！お前がキャスターと戦っているうちに、聖杯にアクセスした。根源へ到達したんだ！」

私は、遂に魔法使いだ。くらえツツ！」

シヨーペンハウアーが叫ぶと無数の光球が発生し抑止の使者を襲った。

「なんだ、キャスターの能力にそっくりだ。」

抑止の使者は光球を切り裂きながらシヨーペンハウアーに近づき話を続けた。

「今ので、わかったろう君のキャスターは気づいていなかったが宝具の行使によって既に第1魔法『無の否定』を扱えていたんだ。君は、あのキャスターに憧れていた。だから、聖杯がその願いに呼応し君に第1魔法を与えたんだ。」

はあ・・これで、いよいよ君を殺さなくてはいけなくなったキャスターだけで世界が納得するはずだったのに、君が自ら破滅を選んだんだ。もう容赦はしないぞ。」

抑止の使者は怒りながら話を続けた。

「僕が呼ばれたのは、第1魔法が真の意味で世に広まることを防ぐためだ。事の発端は真空には無限のエネルギーがあると、ある科学者が証明した事だ。しかし、それだけでは、世界にとって何の害も与えない。なぜならば、それ自体が証明されても誰も何も出来ないからだ。それに、魔術師たちは、第1魔法は既に消滅していると思っ上科学を受け入れていない。交われば危険だが交わることは無いと思っていた。それを君が混ぜたんだ。君とキャスターは進みすぎた

んだ。」

「何度も言うが、何故だ。私が世界にとっての害だと？私は、自分の実力を」「r b：魔術師に >」世に広めきるつもりはない。世界にとつての害を消したいのならアトラス院に行けッ！」

「まあ、子供にはわからないこともあるだろう。情報とは熱エネルギーのように広まりきるまで広まり続けるんだ。」

既に神秘の秘匿すら難しいこの時代では、知るだけで害だ。熱を止めるにはエネルギーを奪い取らないと、そう君の魂の灯を僕がかき消す。それしかないんだ。僕だつてやりたくない。」

抑止の使者は、短機関銃でシヨーペンハウアーを撃ち抜いた。だが、シヨーペンハウアーは死ななかつた。

「キャスターは、サーヴァントだったから限界を迎えたが私は、違う。体を破壊されても空間のエネルギーを物質化して体を修復すればいい。私は、不死身だ。」

「それは、脳が活動できればの話だろう。頭を打ち抜けば君は死ぬ。」
「だから、どうした。私の頭をお前が打ち抜く前にお前のナイフを取り上げてお前を殺す」

「できるといいな」

抑止の使者は、呆れて言った。

シヨーペンハウアーは、抑止の使者に向け光の槍を打ち出した。抑止の使者がそれを避ける所を狙って抑止の使者の足元から、光の板を作り出して抑止の使者を宙に押し上げた。そこに無数の光の槍を球場に展開し抑止の使者を串刺しにした。

「がはッッ！」

シヨーペンハウアーは落ちて地面に転がった抑止の使者の四肢を光の槍で突き刺して固定するとナイフを取り上げた。

「僕を、殺しても無意味だ。次が来るだけだぞ。」

「だから、どおした。そしたらまた、倒すさ。」

「そうか、君は世界に抗うんだな、僕が抗えなかつた大いなる力に。なら、そのナイフを持っていけ、僕が消滅しても、そのナイフは君の手元に残る。君は第1魔法の使い手だ。あらゆるものは、君が持つこと

で世界が存在の矛盾を認識できなくなる。」

「待て、私はお前を殺すんだぞ？何故、そんな事をする？」

「フツ君は『何故』が多いな。じゃあ消える前に、僕の家族の話をするようか。」

ある時代で、世界は危機を迎えた抑止の力が及ばない危機に、そこで僕は臆げな記憶、いや僕では無い僕の情報を知った。

暖かで穏やかとまでは、行かないが幸せそうな家族の事を。そこで知った息子は君とは少し違うが似たような魔術を使っただ。君にナイフをやったのは、たったそれだけの理由だよ。馬鹿みたいだろう？」

シヨーペンハウアーは、話を聞いて抑止の使者を哀れみ、そして、抗いようのない力に取り込まれた事を、抗いきれなかった事を自分の感じていた絶望と重ねた。この英霊の持つ何かをナイフ以外の何かを瞬時に与えられたようなそんな感覚になった。

「消える前に、その息子の事を聞かせてくれ、私、いや僕には父がいらないんだ。母は売春婦で酔った魔術師が孕ませて僕が生まれた。僕は、誰かに何かで認められたかっただけだ。だから、僕は、あなたが消える前に尊敬するあなたについてもっと知りたいんだ。」

「息子の事を知っても僕は君の父親代わりにはなれないぞ？」

「大丈夫だ、勝手にそう思う」

「フツ君は勝手な奴だな。いいだろう少しだけだぞ。君には、ナイフをやったが息子には呪いを贈ってしまった。」

「呪い？」

「ああ、正義の味方に僕が憧れていた事を話したら、それになるって言い続けたんだ。」

「貴方は、正義の、世界の味方じゃないか」

「いや、僕は正義の味方なんかじゃない大切な人も多くの無辜の人々もそして君のような子供すら殺そうとした。」

「そうか、じゃあ僕もその呪い貰っていくよ。」

「なに？」

「僕が、正義の味方になる。父さんや父さんの息子と違って今の僕は

無敵だからな。」

「はあ、父さんか、息子にも、そう呼ばれたことがないから複雑だな。」

「嬉しい?」

「いや、産毛立って気持ち悪い。」

「はははっ」

「じゃあ、そろそろ行くよ。自分から言っただ。すぐに死ぬなよ?」

「わかってるよ、じゃあ僕も行くよ。看取られたくないだろう?」

「ああ、ありがとう」

シヨーペンハウアーが後ろを向いて歩きだすと抑止の使者は静かに息を引き取った。

アサシン エミヤ 消滅

抑止の使者が消えると、こちらに誰か走ってくる。

「おおーい、シヨーペンハウアー君、あまり危険な所に来るな。君が亜種聖杯戦争の跡地に大荷物で向かっていると、君を見かけた他の生徒から聞いて驚いたよ。すぐに時計塔に戻るぞ。早くこちらに来なさい。」

「すみません、教授やることが出来たので、もう講義には出ません。」
「また、そんな事を!君は自分をなんだと思っっているんだ!それにやることってなんだね」

教授が叫ぶのと同時にシヨーペンハウアーは先ほどまで使っていた機材を全て爆破した。

「うわっ!」

「もうこの機材はいらない。泡沫のパラダイムシフトだったが世界のためだ。しょうがない」

「いったい、何が起きたんだ?」

「教授、さっきの質問に答えます。やることは、人助け。そして私は、魔法使いだ!」

「何を、行ってるんだこっちに来い!」

「では、さようなら」

シヨーペンハウアーは、体をエネルギーで包むと飛び上がったどこかへ消えた。

「なんだあれは、魔法使い？本当なのか？」

これからアルバート・シヨーペンハウアーは、第1魔法を持ってしても抗えぬ世界の危機に直面し、衛宮切嗣と同様に、アラヤと契約を交わすのだが、それはまた別のお話。